郷土室だより

第 61 号

昭和63年9月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025

埋もれた文化財 2

安藤菊二

＜その5＞浪（波）除神社のことなど

築地地区を歩いてみると

1. 浪除神社社前の「天水桶」
2. 明石小学校校側の「ガス燈」
3. 聖路加病院副院長邸内の「アメリカ公使館跡記念碑」

など、私の心を惹く遺物がいくつかある。今回はそれらについて、思いつくままを書いてみる。

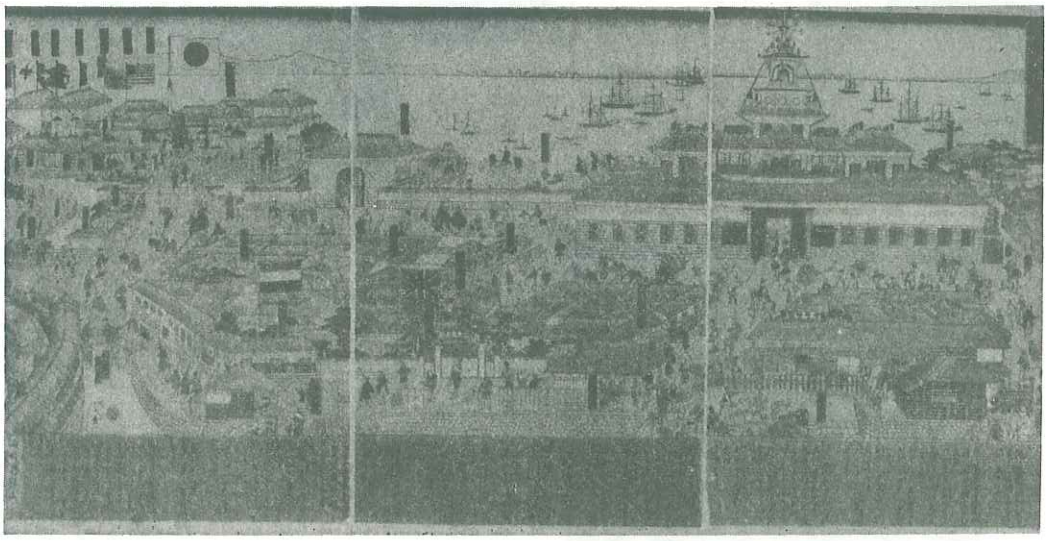
1 浪除神社の天水桶

浪除神社社前の天水桶には

江戸深川
御鋳物師太田近江大掾藤原正次
納
尾州
御蔵
小揚
奉
世話人
尾州廻船中
同 春入中
尾張屋弥八
天保九戊戌歳九月吉日辰

の文字が鋳出してある。小揚というのは、船舶積荷の揚下しに従事する港湾労働者の称で、今日では荷揚作業員という呼び方が一般化しているようだが、日通などでは、今でも小揚の称を用いている。

江戸時代、今の築地六丁目中央卸売市場の南半にあたって、二万坪近い地坪を擁して、尾張藩の蔵屋敷があった。尾州江戸藩邸居住藩士のための米穀、木材その他の必需品を保管受入するほか、国産品の瀬戸物などを海路はるばる江戸に運び、一時この蔵屋敷に搬入の上、日を定めて御用商人を通じ、入札によって江戸商人に売却し、売上金をもって藩財政



「東京築地鉄炮洲景」

の不足を補っていたのである。

江戸へ輸送された瀬戸物の数量は、安政三年の調査では、一三万二八〇八俵という巨額に達しており、入荷時には、こも包みの重い荷物の揚げ下ろしに、多人数の荷揚人夫を必要としたにちがいない。

当時日雇労務者は、「日用座」へ登録して人足札を貰い、日当の中から月何文かを手数として支払う仕組となっていた。肉体労働者の生活は、今日よりきびしかったであろうから、定期的に仕事を提供してくれる尾張藩屋敷はこれらの人々にとっては、真に大事なお華客様であり、さてこそ藩船の無事入港を祈って、こうして天水桶を奉納したのである。

多数の港湾労働者が金を出し合って一藩のために、海上運輸の平安を祈っていることに、江戸商業の裏面史を垣間みる思いがするのである。

2 ガス燈

明治元年一一月開設された築地居留地——明石町一帯の地は、異国情緒のただよう別天地であったが、大正一二年の大震火災で潰え去り燃え去って、今日当時をしのぶにたる遺物を求めることはなはだ難しい。

こうした現況の中で、明石小学校の校側に残る一基のガス燈は、居留地の遺物として、稀少価値を持っている。

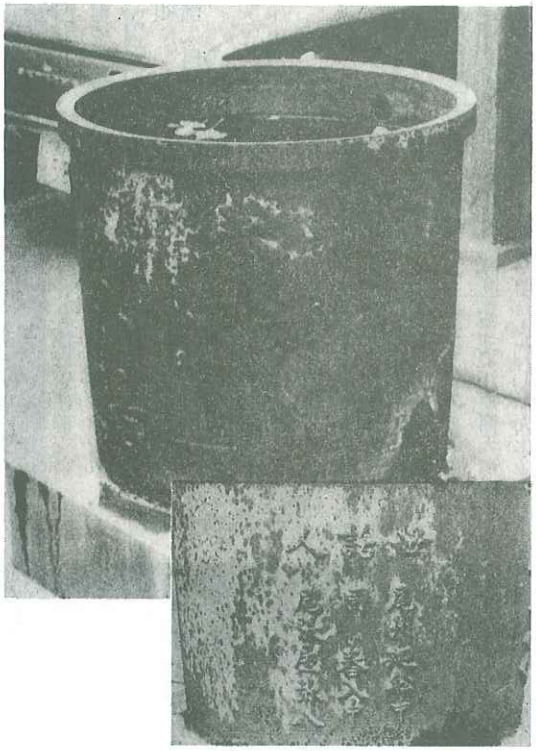
緑青色に塗った鉄製の柱の上部には、左右に突き出たヒレ状の足懸りだか手懸りだかがついており、乳白色のガラスをはめた照明具は、カイゼル帽を冠った人の顔に似ている。

校門入口近くの窓辺近く、植込みの中に取残されて、今は燈の灯ることもないこのガス燈の、かっての仲間は、汐風の快く吹渡る、明石河岸の散歩道や、岸壁近く碇泊する三本マストの帆前船の船腹やらを愁いを含んだ水銀色の光で静かに照らしていたであろう。

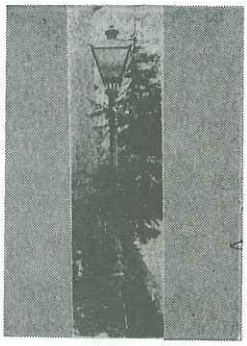
銀座煉瓦街の車道に、八五本のガス燈が灯ったのは、あれは確か明治七年一二月のことであった。文明開化を象徴するこのガス燈は、写真代りの錦画の中に、数多くその姿を止めていて、あれこれ比較してみると、このガス燈が同じ時代に造られたものであることがよくわかる。

東京会議所創建当時の記録によるとガス街燈一本が一八ドル、それに七ドル九分二厘のロビネ・ランプ一組がついて、計二五ドル九分二厘を要したとある。昨今新聞を賑わしているドル相場、一ドル二六〇円（注本稿は、昭和48年に書かれたものなので、当時の換算率です。）に換算してみると、原価六五〇〇円となにがしになる。しかし文化遺産を現実の金銭価格に引直してみたところではじまらない。

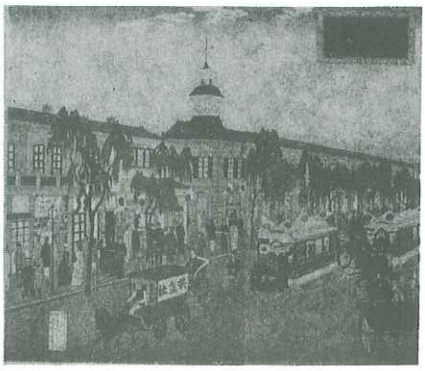
居留地時代の忘れ残りともいえるこのガス燈を、いつまでもたいせつに保存してゆきたいものと私は思う。



波除神社の天水桶



明石小のガス燈



錦絵「東京銀座通煉化石造真図」（部分）

3　アメリカ公使館跡の記念碑

明治政府は、明治四年三月二日二品嘉彰親王に外国事務総裁を宣下し、その年十月には築地数馬橋（現、暁橋）近くの元小笠原家屋敷を仮外国館と定めた。これは東京に官署をおくの初めであったと、大正七年東京市公園課編刊の『東京の史蹟』に書いてある。

政府は、対外関係のいっさいを、ここ明石町で処理しようと意図したらしい。

そのためか、明治年間には、各国公使館の多くが明石町に開設をみた。

早い話、国輝画、六枚続きの錦絵『東京築地鉄炮洲景』（明治二年正月刊）――（注・表紙の写真参照のこと）には、小田原町二丁目の河岸地に面して、ユニオンジャックの翻える「英岡士仮館」を描き、南飯田町の備前橋（前記の数馬橋と同じ）前の角地に、三色旗翻える「蘭岡士仮館」を描いている。

そればかりでなく、御役所（運上所）に翻える日章旗と並んで、「あめりか、ろしあ、ふらんす、ぽるとがる、すいつつる、ふろいせん、べるぎい、いすぱにや、すえいでん、いたりい、おおすとりや、でんまるく」など一二か国の国旗がへんぽんと風に翻えるところを描いているのである。これら諸国の「岡士仮館」が明石町にあったか否か、遂一調査をする暇を持たぬが、一時期、明石町に、アメリカ合衆国公使館、スペイン公使館、ブラジル公使館、その他スエーデン、アルゼンチン、ペルーなどの公使館があり、大正八年には、明石町三六番地に「ローマ法王庁使節館」までが創立されている。

これら諸外国公使館の跡地には、何の標石も残されていないのであるが、唯一か所、アメリカ公使館跡の、現在聖路加病院副院長邸内に、かってアメリカ公使館のあったことを記念する標の石が残されているのは珍重に価する。私は聖路加病院の北川千秋氏から写真を得てこれを知ったのであるが、その写真で見ると、目分量で縦四尺×横五尺くらいの御蔭石の面に、盾を双脚に踏まえた、肉付き豊かなコンドルが双翼を拡げ、頭上にリボンが翻えり

アメリカ公使館跡記念碑

それを半円状に取囲んで、アメリカ独立当時の一三州を示す一三箇の星が肉厚く浮彫されているのである。

北川氏の話では、庭内にはこうした彫刻を持つ石が五・六箇あるのだそうである。いずれも、築山の斜面に埋めこむような形でおかれてあり、裏面を見ることができず、表面には文字の刻するものがない。

アメリカ公使館は、安政六年麻布山元町の善福寺におかれ、維新後、明治八年七月一二日、鉄炮洲の外国人居留地に移転し来り、同二三年五月赤坂榎坂町の新公館に移り去った。公使館のこの地にあったのは、一八七五年から一八九〇年にかけての一五年間、その間の特命全権公使は

9代　John A. Bingham
　　明治 6. 10（1873）
10代　D. W. Stevens
　　明治 11. 10（1878）
11代　John A. Bingham
　　明治 12. 5（1879）
12代　Richard B. Habbard
　　明治 18. 7（1885）
13代　John F. Swift
　　明治 22. 5（1889）

の五氏である。推測をもって言うならば、一三代スイフト公使の時、公使館この地を去るに当って、この記念碑を作り、公使館の遺跡であることを後世に残そうと意図したものではなかったか。それならば、壱箇でことたろうものを、五・六箇もあるというのはなぜであろうか。私には解することができない。

アメリカ公使館について尋ねるならば或はこの碑の建設の経緯を知りうるかも知れないが、私はまだそれをなしえずにいる。

＜その6＞宝探し

前回、明石町のアメリカ公使館跡に彫刻のある石の残っていることを書いてから、十日ほどして、聖路加病院の北川千秋氏が、病院の会報「明るい窓」を届けてくださった。（注・北川千秋氏は昭和60年9月8日没。この原稿は、昭和48年に書かれたものです。）築地居留地の調査に情熱を燃やしておられる氏は、長年にわたって、「隅田川今昔」の稿を書き綴ってこられ、その一一二回目に、私と前後して、この「彫刻のある石」のことを書いておられるのであった。

スケッチ入りの北川氏の解説によると、「彫刻のある石」は、庭内の築山の頂や中腹のあちこちに、はめこむように置かれていて、図柄も、五稜角の大星一個を彫ったものや、盾を彫ったものや、前に写真で載せた、鷲に十三星

を彫ったものなどがあるのだという。

前稿を書く時、機を失し、実地の検分を怠って、中途半端な記事を書いたあと味の悪さに、私は急に思い立って、この石を見に出かけることにした。

この十三日、同室の係員を誘い、企画室の職員に写真撮影を頼み、聖路加病院の北川さんに案内役をお願いして同勢四人になった。

。　。　。

つい二・三日前、知人から、明石町の天主教会に、明治初期の鐘が残っているという話を聞いたところだったので、歩きながら北川さんにそのことをいうと、ついですから見て行きましょうと、病院旧館前の道路を横切って、白ペンキ塗り平家建、温室でもあるかと思っていた建物の、勝手口の木柵を排して、私達を導いた。

露地のつきあたり、狭い空地の、尺余の高さの土壇の上に、細い鉄骨を組んで、見上る丈余の高さの所に青銅の洋風の釣鐘があった。知人の言ったように、YEDOという文字やDEという文字が読みとれる。フランス文で何か鋳出してあるらしい。私達が釣鐘の直径を計っている間に、カメラマン氏は鉄骨によじ上って、パチリパチリ写真を撮り始める。同行した係員も、いつの間にか足場を求めて、鉄骨に登り、横文字を写しはじめた。

カメラ氏がしきりに写真を撮るのを見ていた北川さんは、教会に良い写真があるかも知れないといって、司祭館に入って、主人の牧師さんと話しをはじめた。二個あった鐘の内、大きい方は小石川関口の教会に移し、それは戦災に遭って焼けくだけてしまったというような話をしている。

釣鐘には 1876 の文字がある。明治九年である。これもまた埋もれた文化財の一つに数えてよいだろう。

郷土室より

この鐘については、「中央区の文化財 (二) 美術・工芸・古文書」(昭和五一年中央区教育委員会刊) に詳しいので、引用して紹介します。

銅製洋鐘

所在　明石町九

所有者　同　宗教法人

築地カトリック教会

高さ約九五センチメートル、径約六八センチメートルの〝ビッグ・ベン型〟である。

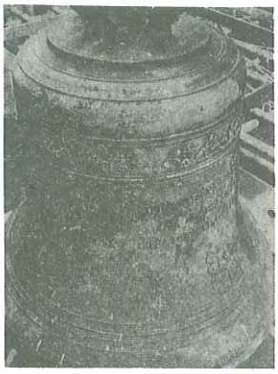
鐘の表面にはキリストとマリアの陽鋳像と終のフランス語の陽鋳銘がある。

この鐘は明治九年（一八七六）にフランスのレンヌで製作され、カトリック教の習慣に従って、翌年三月十一日、横浜で命名式が行われ、その後築地に運ばれたらしい。ルマルシャル神父は、「パリ外国宣教会」派遣の日本副司教だった人で、鐘をフランスに発注したのもこの人だったらしい。

現在、教会の司祭館玄関前にある鉄塔に吊し、時報に使用されている。

なお、当教会には、この鐘より少しおくれて、もうひと廻り大きい鐘が、フランス人法学者ボアソナード夫妻によって寄贈された。

この大きいほうは、司教座が関口（文京区）の教会に移された時に、一緒に関口へ移され、〝関口のルルドの鐘〟と呼ばれていた。この鐘は、戦時中の供出を免かれたけれども、空襲で割れてしまい、その後改鋳されて、今も関口カテドラルのルルド脇に置かれて時を報じている。



築地カトリック教会の鐘

ヘンリー・フォールズの指紋発祥之地記念碑に近い、聖路加病院副医院長橋本氏邸の、人目に立たぬ質素な通用門のくぐり戸を押して邸内に入る。左手に守衛所があって、人の好さそうな老人は、北川氏の二言、三言の挨拶に、快よく私達の入園を許してくれた。

倉庫めく建物や、生垣に囲まれた住宅の間を通り抜ける私達に気づいて、奥まったところで、小犬がしきりに吠えている。

岡蔭に、まだ花の咲き残る二・三本の桜の若木のあるのが眼に入る。右手に拡がる、春浅い庭園の芝生は、爪先上りに高まり、右方は起伏して百米も先の芝生につらなり、左方の丘は高まりつつ延びて、築山になっている。足下に踏みしだく芝やクローバーの緑に交って、黄花のタンポポが一面に咲き輝いていた。

石（盾の彫刻）

樹木のほとんどない芝山のはずれが高さ三メートルほどの築山の頂上である。ここに、十三の星で飾り、七条の縦筋を持つ盾を彫った、四角な石が置いてある。彫られた盾の大きさは、縦六二センチ、横五二センチもある。

そして、意外なことに、十三の星と、七条の縦筋は、表面から裏面まで、羊かんでも切るように、垂直にくり抜いてあり、星の穴から、背延びをした草の穂が頭を出している。

北川さんは、腰をかがめて、草の穂をヒョイヒョイと抜捨て、昔は眺めがよかったろうと思うのですが、今は防潮堤ができて、まるでいけませんといって苦笑する。築山から見おろす私の目路に、邸の外屏と、コンクリートの防潮堤が重なり、それとまた対岸月島の護岸が重なり、川面は見えないのであった。ここアメリカ公使館跡地は、その後の一時期メトロポールホテルになって、木下杢太郎が「メトロポールの灯が見える」と唱った。この有様では、よしやホテルが残っていようとも、あのなつかしい叙情味に富んだ、「メトロポールの灯」の興趣も何もあったものではなかろう。

築山の頂上から、一五・六段の丸石を踏んで芝生に降りると、南側の桜の木かげの斜面に、鷲と星を彫った石があった。北川氏は、築山の裾を左へ戻って、ここに一つ、そこに一つ、それからあそこに一つと、標石のある地点を指点され、守衛さんにはよく話しておきますから、ゆっくり御覧になってください、私は用事がありますからといって帰っていった。

「彫刻のある石」の大きさは少しづつ違っている。図柄は三種類あって、

1、鷲とリボンと十三星　二個

2、十三の星で飾り、七本の縦条を持つ盾を彫ったもの　三個

3、二重劃の大きな五稜星を彫ったもの　一個。（星の形はくり抜いてある）

頂上にある石を1、南側のものを2、築山に沿って3、4と仮番号を振って測った石の寸尺は、次のごとくであった。

	図　柄	縦	横	厚さ
1	盾	94 cm	70	19〜20
2	鷲と星	93	86	〃
3	盾	87	110.8	〃
4	星＝五稜星	87	110.5	〃
5	鷲と星	91.5	84	〃
6	盾	96	84.5	〃

風はいつか凪いで、時折わずかな風が吹いて草の葉をゆるがすばかり。八〇〇坪を越す、木立のないアメリカ式の芝生庭園には、陽光が明るく降りそそいで、ここは別天地のように静かである。

私達は、いそいで拓本をとりにかかる。同行者がす早くどこからか洗面器を見つけ、水を汲んで来てくれた。

私は気づかなかったが、築山の横手に、コンクリート製長方形の池があって、底の方に金魚が身を潜めている。水は濁っていたが、拓本をとるにはこれで充分間にあう。

「鷲」と「盾」と、二枚の拓本をとり終えたころ、遥な空を渡って、服部時計店の十二時を知らせるチャイムの音が流れてきた。

。　。　。

それにしても、こうした手のこんだ彫刻石をここに残した理由は何だったのであろうか。北川氏は「パレスホテル」のPR誌にも、「東京歴史の散歩」を連載しておられ、三月二八日発行の四月号で、この彫刻石を紹介し、

西欧の王族や武士が、その家紋を旗に、木に、建物に、染め抜いたり彫ったりしたように、この石も建物のどこかに嵌めこんだものか、また庭の飾り石に並べたものか、あるいはキイストーンのように出入口上部の要石として使われたものか、いまだ判別ができないでいる。と書いておられる。

たしかに、そういう伝統のもとに造られた彫刻石にちがいない。しかし、見かけだけでも、これらの石は相当の重量がありそうで――木造二階建の安普請？の建築の軒にはめこんだものとしては、ちと重量が勝ちすぎそうな気がする。それに火に焼かれた形跡がない。とすれば、氏の第二説に言われる

ように、最初から庭に配置されていたということになるが、果してどうであろう。公使館時代の記録の出てくるのを待ちたい。　（七三・四・十七）

郷土室より

○第60号でもお知らせしましたとおり「埋もれた文化財」は、安藤菊二氏が中央区役所の庁内報「ちゅうおう」に、昭和47年から48年にかけて連載した記事に手を加えたものです。左に発表年次を記しておきます。

その1　加茂能人形の山車
（47年7月1日号）
その2　模型加茂能人形山車
（47年9月1日号）
その3　住吉神社の彫刻など
（47年11月1日号）
その4　正月行事、九鬼の札切
（48年1月1日号）
以上は、「埋もれた文化財　1」として、郷土室だより60号に収録。
その5　浪除神社のことなど
（48年3月1日号）
その6　宝探し
（48年5月1日号）
「埋もれた文化財　2」本号。

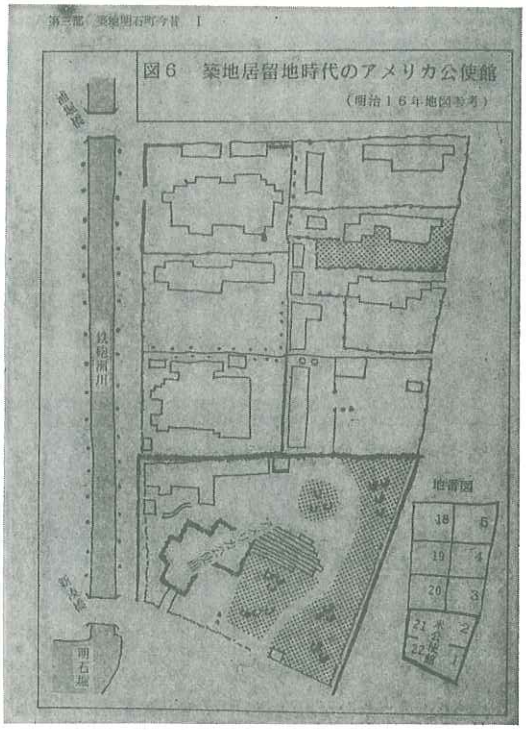
〝宝探し〟の〝宝〟である石の彫刻について、本文にも登場の北川氏がまとめたものが、「築地明石町今昔」の中におさめられています。

また、川崎晴朗氏も、「私の築地居留地研究（中）」で、この記念石についてふれ、さらに、昭和59年10月に、残った記念石のうち三個が病院から米国大使館に寄贈されたエピソードを紹介しています。

米国公使館跡を示す標石を、守り、保存してきた聖路加病院ですが、現在、病院の全面建て直しを含めた再開発計画が進行中です。計画案では、現在駐車場として利用されている部分に新病院を建設。隅田川寄り、記念館のあるところには、貸事務所、住宅など、四〇～五〇階という高層ビルが並ぶようになります。今、明石町の風景も、大きく変わろうとしています。

「築地明石町今昔」　北川千秋　著
聖路加国際病院
聖路加礼拝堂委員会
昭和61年

「私の築地居留地研究（中）」　川崎晴朗　著
昭和62年



「築地明石町今昔」より

○東京を語る会のお知らせ

第55回東京を語る会を、次のように開催いたします。

『築地ホテル館
明治近代ホテルの夜明け』
講師　大鹿　武　氏
日時　63年10月15日（土）
午後2時～3時30分
会場　中央区立京橋図書館鑑賞室

講師をお願いしました大鹿先生は、交通、観光施設の専門家。わが国のホテルのルーツ、築地ホテル館建設の経緯を中心に、維新前後の東京、横浜のホテル群像、幕末の海外渡航と旅券の誕生などをまとめて、昨年10月に、「幕末、明治のホテルと旅券」として出版されています。今回は、築地ホテル館にテーマをしぼって、お話をうかがいます。

○築地ホテル館とは

外国人宿泊所兼交易所として建設された。明治元年十一月開業。近代都市ホテルの魁と位置づけられている。

設計はブリジェンス、清水喜助。木造四階建で、客室は一〇三室。和洋折衷の外観が独特で、完成後は東京新名所として人気を呼んだが、明治五年二月二十六日の大火で焼失した。

所在地は中央区築地六―二十
（現在の築地市場駐車場のところ）